

*) 名古屋大学文学部考古学研究室 464-01 名古屋市千種区不老町

1. 水野正好氏の縄文集落論

縄文時代の集落の構造を、はじめて解明したのは水野正好氏である[1]。その内容はすでに紹介されていたか、本人が執筆して発表されたのは1969年である。そのもっとも重要な点は、台地の縁に住居を構え、円形の内部を広場あるいは貯蔵地区として利用し、背後の斜面に貝塚を形成するなどの、安定したシステムをもっていることを明らかにしたことである(図1)。

そしてこの水野集落論は、その後の相次ぐ縄文集落の発掘調査の大きな指針となってきたのであり、画期的なものであった。それらの発掘は大規模開発による事前調査という形態をとる場合が多いが、そうした事前調査の延長上に、水野集落論ではカバーしきれない例も増加してきた。

この事前調査の現実を第1の理由とし、さらに第2の理由を付加するとすれば、縄文時代の食生活、特にそれまで軽視されてきた植物質食料の研究が進んできたことである。そのなかでも低湿地におけるドングリ類の貯蔵穴群の発掘は、集落の範囲をかなり大幅に考え直す必要を生じてきている。極端な場合、1遺跡を2遺跡に区別して理解しかねない場合が増えてきたのである。

2. 低湿地におけるドングリ類貯蔵穴群

このような認識が一段と明確になったのは、熊本県宇土市曾畑貝塚の1986～87年の発掘である[2]。この時の発掘対象は現水田化の低湿地における、53基にもものぼるドングリ類の貯蔵穴群であった(図2)。それ以前の発掘では台地上の貝塚のみが対象となり、そこから数10mも離れた台地下はまったく問題にされなかったのである。しかしこの場合、周囲に同じ縄文前期の遺跡が分布していないこと、貯蔵穴に混入していた土器片によって同時期であるのが確認できたことである。

1988年に発掘された石川県羽咋郡押水町ダイラクボウ遺跡は、隣接するタケノコシ遺跡と文字どおり別遺跡扱いであったが、発掘を契機に一遺跡として取り扱われるこ

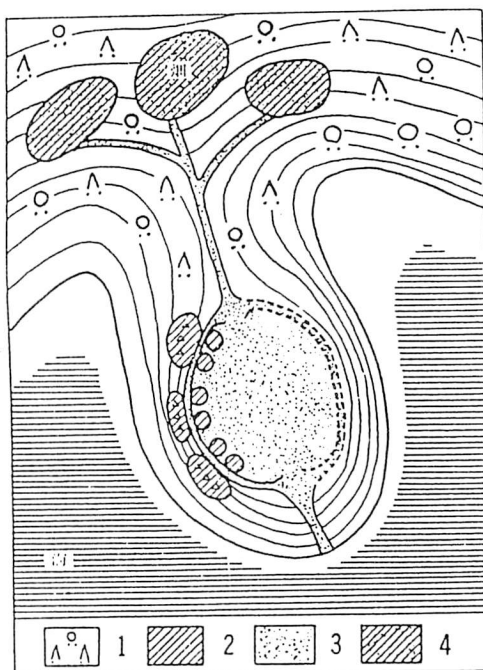


図1 水野氏の縄文集落復元

1:原生林(狩場), 2:住居・貝塚,
3:道路・広場, 4:畑.

とになった[3]。両遺跡は小河川である前田川を挟んで南北に立地し、便宜上旧名称で記せば、ダイラクボウ遺跡はさらに南の山の日当りの悪い山裾に、前田川に続く湿地に望んで形成されたドングリ類・トチなどの貯蔵穴群である。一方タケノコシ遺跡は日当たりがよく、発掘は行われていないが縄文後期～晩期前葉の遺跡である(図3)。

そして10数基の貯蔵穴のなかには土器片などがみられず、時期が不明確である。またドングリ類などの遺存量も多くない。そのため名古屋大学年代測定資料研究センターで、ドングリ類を用いて測定したところ、タケノコシ遺跡の後半段階に相当する縄文晩期前葉の年代が判明し、両遺跡の一体性が証明されたのである(図4)。

愛知県東海市ト、メキ遺跡もその好例で、クヌギまたはアベマキとみられるドングリ類のみで時期は判明しなかったが、同様に本センターで次のように測定され、縄文晩期中葉に属することが判明した。

2480±100BP(530±100BC) NUTA-547

台地上の集落とは離れて形成されている。これらに代表される低湿地の貯蔵穴・貯蔵穴群は特に西日本に多い。次にその主要な例を列挙するが、いずれも著名遺跡であるにもかかわらず集落跡は明確でない。すでに破壊されている場合もあるであろう。

鳥取県岩美郡福部村栗谷遺跡(後期)

岡山県赤磐郡山陽町南片前池遺跡(晩期)

山口県熊毛郡平生町岩田遺跡(晩期)

熊本県宇土市西岡台遺跡(前・中期)

また弥生時代にも類似例が多い。

3. ドングリ類の低湿地貯蔵の意義

最後に、ドングリ類を低湿地に貯蔵する意義について記す。

トチやドングリ類などの堅果類は縄文時代の主食であった。そのためによく乾燥して屋根裏にあげ、長期保存していたとみなされる。成りの悪い年への備えである。しかし乾燥させてしまうと、皮むきも、製粉も、アクぬきも大変手間がかかり、効率も

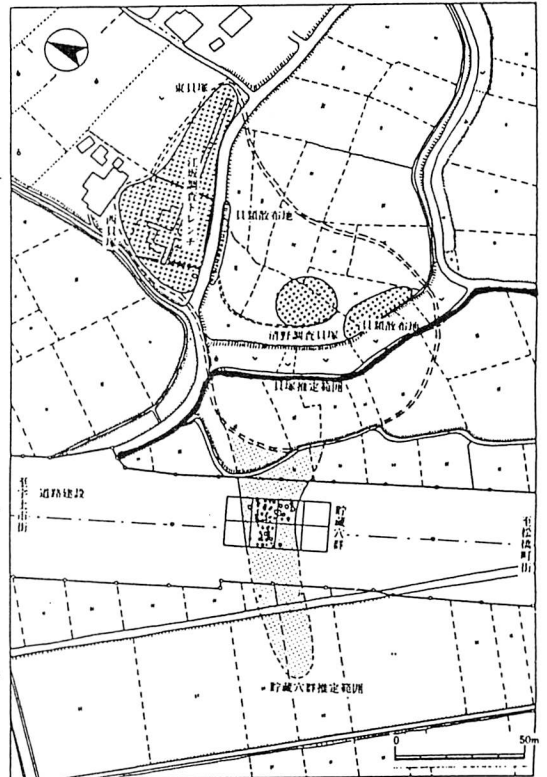


図2 熊本県曾畑貝塚地形図
(太線は崖線を示す)

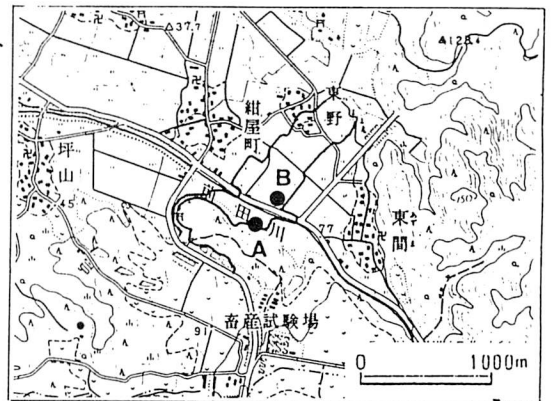


図3 ダイラクボウ遺跡(A)と
タケノコシ遺跡(B)の位置

	C ¹⁴ による年代(B.C.)	北 陸	
後期	1122±180 (検見川)	タケノコシ遺跡	1070±110BP (NUTA-1343)
晩期	950±140 (八幡崎) 640±150 (西志賀)	御中野	800±100BP (NUTA-1277)

図4 タケノコシ遺跡の存続期間とダイラクボウ遺跡の測定年代

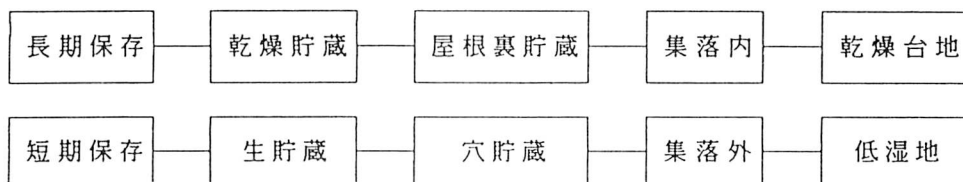


図5 堅果類の貯蔵法

悪くなる。そのためその冬食べる分のみは穴に入れ、乾燥しないように生貯蔵するのである。今でも冬場の生鮮野菜を確保するために、たとえば大根を穴を掘って埋めておくのと同じことである。

縄文時代人は二つの貯蔵法を使い分けていたのである(図5)。縄文時代の食料として狩猟・漁撈の獲物は副食品であり、ドングリ類などの植物質食料が主食であるという認識が強まり、従来よりも集落の機能・空間を拡大して調査すべきことが緊急的な課題になってきた。すなわち、住居地区と低湿地の貯蔵穴群とは基本的に分離していることを前提に、集落跡の発掘を企画すべき段階に来ているのである。

そして両者の距離が分離すればするほど、貯蔵穴内に時期判定資料としての土器片などの混入する機会が減少する。そしてドングリ類などの遺存量も多くないことが多く、微量資料による年代測定の重要性が一段と高くなるのである。

参考文献

- [1] 水野正好(1969), 縄文時代集落復原の基礎的操作, 古代文化, 21-3・4, 1-21.
- [2] 江本直・渡辺ら(1988), 曾畑, 熊本県文化財調査報告, 100.
- [3] 橋本澄夫・垣内光次郎(1990), 押水町ダイラクボウ遺跡の貯蔵穴, 考古学ジャーナル, 317, 23-24.

A new perspective in the settlement research
of Jōmon period

Makoto WATANABE

*) Department of Archaeology, Nagoya
University. Furou, Chikusa, Nagoya, 464-01.

In the research on diet of Jōmon period, the study on vegetable foods, which has been unregarded, is making rapid progress. Especially, it is very important to examine the group of acorn storing pits locating in the lowland. As the result of the study, we find that it is necessary to reconsider the limit of settlement drastically. In another words, we must arrange to excavate on the premise that a settlement area (former concept on "settlement") is separate from a group of storing pits in the lowland basically.

If there is a distance between them, it is more difficult to find even a shard of pottery or other archaeological materials as samples for age determination in a storing pit. And because we cannot always find acorns in good state of preservation, it will be more important to determine the age using a microelemental sample.